1997年度

トラークル協会会報

第3号

1998年 3月

トラークル協会

〒271-8587　千葉県松戸市栄町西 2-870-1　日本大学松戸歯学部独語研究室気付

TEL 047-368-6111(内線446)

１９９７年度春季研究発表会
レジュメ・質疑応答

1.トラークルの跡を訪ねて

石橋　道大

１９９７年４月上旬にザルツブルクとインスブルックを訪れたので、カラーコピーしてお配りした写真をご覧にいただきながら、お話ししたい。

まずザルツブルク。生家内にあるトラークル記念館・研究所にヴァイクセルバウム氏を訪ね、トラークル協会とのコンタクトをつくった。今後の交流が期待される。

市内には詩人に関わりの深い建物等がかなり沢山あり、一通り見るのに二日は必要である。父の店兼住居のあった Judengasse は、昔の写真ではぼろぼろの家々が続いているが今は小奇麗な商店街で、昔のおもかげはない。トラークル家の住宅のあった所は、Sparkasse の新しい建物になってしまっている。近くの Café Glockenspielもトラークル家の住居だったが、今は市内でも有数の華やかなカフェである。すぐ近くには詩人がよく行った Mora という書店もある。通った学校は大学の建物として残っている。ミラベル公園の横のザルツァッハ川の川岸の新教教会は洗礼を受けた場所。受洗証明書はトラークル記念館に展示されている。トラークルがよくそうしたように、川岸の散歩道を駅の方へぶらぶら歩いて行くと、鉄橋にぶつかる。橋脚に、近辺を素材にした詩『 Vorstadt im Föhn 』が刻まれた石板。すぐ横の屠殺場から血が川に注いでいたと詩にあるが、今は地域の熱供給施設の建物になっている。そこからさらに 1.7キロ川岸を進むと、Trakl-Stegという細い橋があり、ご覧の写真のような記念板も取り付けられている。閑静な住宅街で、岸辺の散歩道が快い。旧市街に戻り、橋を渡った所の Engel-Apotheke は、トラークルが勤めていた薬局で、入口に『Im Dunkel 』の石板。一階はピカピカだが、地下は昔とあまり変わっていないといわれる。旧市街のペーター教会墓地は、東の小さな入口から入るとすぐ右に『St. Peters Friedhof 』を刻んだ石板。極美の墓標が立ち並ぶ。その西に、小さな地図には出ていない Toskanini-Hofという中庭風の広場があり、そこの石段を登り、さらに少し坂道を行くと、『Am Mönchsberg 』の石板。ミラベル庭園に戻り、バス通りに面した塀の内側に、『Musik im Mirabel』の石板。Kaigasse 12 の Finanzamtの中庭には、ご覧の写真のような Trakl-Brunnenがある。ここは誰もいなくて静か。

郊外のヘルブルンはバスで２０分。宮殿横に庭園があり、そこの池の横の八角堂の壁に『Die drei Teiche in Hellbrunn』の石板。この詩にはトリトーンが出ているが、ここの池の石像は皆トリトーンである。

次にインスブルックを訪れた。まず墓だが、旧市街からバスで 6、7 分、ミューラウ下車。４分ほど丘を上って行った所のミューラウ墓地にある。アルプスを見上げる美しい墓地。これは二つ目の墓で、クラーカウにあった最初の墓は、銅板部分だけがザルツブルクのトラークル記念館に展示されている。墓地を出て旧市街に戻るバスで停留所ひとつ戻ると、川岸にトラークル公園。ご覧のような小さな記念碑もある。公園の向かいには、ハインリッヒとトラークルが会った場所である Gasthof Dollinger。市中心部に戻ると、ブレ

ンナーの編集の話し合いが行われたカフェ・マキシミリアンの入っていた建物もある。ブレンナー文庫は１９９７年３月に移転した。ホテル Goldener Adler は、イタリアへ行くゲーテが宿泊したことで有名だが、トラークルもこのホテルのネーム入り絵はがきを使ったことがあり、オリジナルを記念館で見せてもらった。今日でもこのホテルの客室にはネーム入り絵はがきが置いてある。このホテルはゲルマニストには有名になりすぎたかもしれないが、素直に泊まってみれば、きっと悪くない印象を得るだろう。蛇足ながら、この種の、有名になりすぎた、ないしは観光地化しすぎたといわれる場所でも、意外に心を動かされることが少なくなかったことを告白しておきたい。訳知り顔のゲルマニストの話は聞き流しておけば良い。詩人ゆかりの地を訪れたいと願う気持ちが強ければ、そんな場所でもきっと新しい発見があるにちがいない。

［要約という性格上、簡単な記述に止めざるをえなかったが、拙稿『ドイツ・オーストリア文学紀行』（ ノルデン、34号、1997 ）には、詳しい道順が載っているので、両都市に行かれる場合は、ぜひ御参照いただきたい。］

宮原　朗　：トラークルをザルツブルクは随分大事にし、町の誇りと思っているようであるが。

石橋　　：トラークルの詩を刻んだ石板は、ほとんど統一規格なので町で作ったものと思われる。

中村朝子　：当地に 5、6 年前に行った時には、石板は少なかった。最初に掲げられたのは、『Die schöne Stadt』で、記念館のヴァイクセルバウム氏によると、この詩は、「美しい町」というザルツブルクのイメージに貢献するために選ばれたそうである。しかし段々そうではなくて Apotheke の所に掲げられている『Im Dunkel 』のような詩も掲げていくとのことであった。ともかく多く掲げられるようになったのは、最近のことではないか。

三枝紘一　：『フェーンの吹く郊外』も掲げられているということだが、これは町の宣伝にはならないのではないか。むしろ逆宣伝になるのではないか。

石橋　　：最近はその辺は綺麗になったからよいのではないか。

三枝　　：詩人は市民権を得たのであろうか、それとも観光資源として利用されているのであろうか。むしろそういう面からも捉えられるのではないか。

石橋　　：町の人はどう思っているかわからない。

三枝　　：生誕 100年祭にあたる1987年にトラークルの記念切手の発行を当局に働きかけたが実現しなかった。しかし最近は市内の詩のゆかりの場所に幾つもその詩が掲げられるばかりでなく「トラークル小橋」や「トラークルの泉」、またこれはインスブルックであるが「トラークル公園」まで出来ているという御報告を聞き、その様変わりに実際驚いている。

中村　　：『Am Mönchsberg 』を読んでいると、ザルツブルクの住人らしい年配の男性に、そんな詩を読んでもわかりっこないよ、この詩人は気違いだから、と言われた。

三枝　　：一般の人にトラークルの評判を質問されたのか。

石橋　：その時間的余裕がなかった。

三枝　：フューマンがそのトラークルに関するエッセイのなかで述べていることであるが、ザルツブルクを訪ねたとき、ホテルマンに、詩人をどう思うか、と尋ねたところ、あれは妹と関係があった、と言ったという。いずれにせよ、難しい変な詩を書いた詩人ということで片づけられていた。昔からこういうレベルでは町では話されてはいた。

石橋　：インスブルックの郊外のランスにある、トラークルの行きつけの居酒屋に、Traklstubeと名付けられた部屋があるということである。

三枝　：ランスに近いホーエンブルクには、トラークルが滞在していた小さい館がありほとんど当時のまま残っている。

宮原　：トラークルの墓の碑面は何を象ったものであるのか。

石橋　：十字架である。

2.リルケからみたトラークル

植和田　光晴

１９２６年、フィッカーによって出版され、その後のトラークル研究の重要な資料の一つになった『トラークル追憶（*Erinnerung an Georg Trakl . Zeugnisse und Briefe*）』［以下『追憶』と略記］において、冒頭のカール・クラウスの一文に続いて、リルケがフィッカーに宛てた二通の手紙の抜粋が収録されている。１９１５年２月に書かれたこれらの手紙は、もっとも早い時期のトラークル批評として、その後のトラークル研究の展開にとりわけ重要な役割を演じてきた。この発表では、これらに、１９１７年２月リルケからエアハルト・ブッシュベックに宛てられたもう一通を加えた計三通の書簡テクスト（『書簡全集』全６巻、インゼル社刊）にたちかえり、『追憶』の抜粋では脱落している現実的コンテクストへの指示をもあわせて検討することによって、リルケのトラークル－理解・評価を、より広い関連の中で捉えようと試みた。また、上の三通の書簡の中心をなす『追憶』掲載の部分について、リルケのトラークル－解釈を書簡＝テクストにおいてあらためて検討した。結果は以下の(1)(2)(3) の三点に要約される。

(1)書簡のテクスト環境に関して：１９１４年２月８日のフィッカー宛の書簡＝テクストにはリルケ－トラークル－関係の成立のいわば仲介者としてのフィッカーとリルケの関係についての記述、さらには（義援金の贈与によって）このリルケ－フィッカー－関係成立の端緒を提供したヴィトゲンシュタインへの言及がなされている。そして、この書簡をふくめ、リルケからフィッカー、その他へ宛てられた書簡をヴィットゲンシュタインの伝記的資料とあわせて見ていくと、リルケの実存＝言語的基本態度が明らかになる。即ち、言語危機の極点にあったこの時期においてなお、リルケは根底において言葉への不動の信頼を保持しているということである。

(2)フィッカーに宛てられた１９１５年の二通について：「この美しい詩［＝『ヘーリアン』］の各行の始まりと終結は、どれも言葉に尽くしがたく甘美で……そこに囲い込まれた空間は、垣根を越えてその向こうへと絶えず押し出し……所有不可能な広大な平面へと合流していく」「この鳴りだし(Auftönen)と響き止み(Hinklingen)の諸条件は唯一無二の

もので……鏡の空間のように踏み込むことができない」等、一見したところ恣意的、主観的な印象批評とも受け止められかねないこれらの記述は、合理的な理解の届かない、非－言語的な領域へと越境するトラークルの詩の言語の、魅惑と拒絶の二律背反の体験に呼び起こされた「驚き」を、いわば現象学的に本質記述しようとしているとみられるべきもののように思われる。これらのリルケの記述において理解不可能性を一方的に強調すればトラークルの詩は外的対象や風景ではなく、詩人の特異な精神的経験の像、遮断された気密空間を描いているため、判読不能な象形文字で書かれたもののように解釈を拒むという、後の W. キリーの主張の先例をここに見ることになる。しかし、これらのリルケの記述は根底において、トラークルの詩はそのような密閉された錬金術的言語空間ではなく、読者の生活世界における経験から意味づけが可能であり、読者の追体験に対して開かれた言語構成物であるという、上のキリーと対立的な主張（H－G. ケムパー）にも通じていることも見落とすべきではない。例えば、詩『ヘーリアン』の成立時期や、その作者（トラークル）についての資料の照会、とりわけより直接的な「彼（トラークル）は誰であったのか」という問いにおいて、そのことがよく了解される。

(3) 1917 年の E. ブッシュベックへの手紙について：この書簡には、上の二通におけるような二律背反（魅惑と拒絶）体験は背景に退き、トラークル作品に対するリルケの最高度の評価が前面に押し出されている ―― 「トラークルの詩は私にとって崇高な存在を示す一つの対象です」 ―― 。リルケはしかし、やはりここでも、単にリルケの主観的な感慨を述べるにとどまらず、本質直観にもとづいて、トラークル作品の客観的評価とその根拠を示している ―― トラークルの著作は詩の歴史において、詩的形姿の解放のための重大な寄与で」あり、トラークルの作品によって精神的空間の新たな次元が測量されることになった ―― 。

以上みてきたように、これらのリルケ書簡の記述から、リルケの基本的言語態度と、それに基づくトラークル－理解・評価の核心を読み取ることができる。同時に、また、これらの記述は、言語的制作者としてのリルケ自らの、歴史的位置づけをも示している。すなわち、これらにおいて、オルフォイス、リノス、李太白という神話的あるいは伝説的な形姿にトラークルを併置するリルケは、自らをこのトラークルに「近しい人」と言うことによって、自身をもこの同じ系譜へと繋いでいるのである。

これらの書簡によって、このときすでに印象主義的言語理解の段階を脱していたリルケは、新たな言語空間の可能性を開いた［表現主義］詩人トラークルの、言語表現史への貢献の、最初の有力な目撃証人として名乗り出ているのである。

高橋喜郎　：リルケはトラークルより長生きしたので、トラークルのリルケに対する影響ははっきりした形で残っていると思うが、初期の『１９０９年集』にはソネットが多いのは、トラークルがリルケの作品を読んで、かなりリルケを意識して書いた結果ではないか。

植和田　　：トラークルはリルケの作品も読んでいると思うが、考えられる多くの影響関係の中で、特にリルケが影響がつよいとは言えないのではないか。

高橋　　：トラークルの『１９０９年集』以前に書かれた手紙で、「同胞がやっている

ようなことを私もできればよい」と言っているが、「同胞」と意識しているのは、同じ国の人だから多分リルケのことであると思う。

植和田　：トラークルはリルケにそんなに親近感を感じていたとは思えない。生き方も大体違うし、言語の質も違う。

高橋　：リルケは当時すでに大家だから、トラークルは意識して『新詩集』の影響を受けたものと考えられる。『１９０９年集』にソネットが２０％近くもあることは、この時期リルケの影響がかなり強いと思う。

植和田　：論証を要するが、あり得ることとは思う。しかし私の立場からすればむしろ否定的である。

西田英樹　：最後の結論として、リルケはトラークルの紹介者と言うことであるが、リルケ自身は表現主義の方へ行かないし、かといって古典的な抽象への道も歩まないし、またシュールレアリスムスの方にも行かない。というのは物というものが第一次大戦等で壊されていくというのを見るのにしのびないというようなところから、後期のリルケの決定的な一つの詩の展開の軸になるのは、Verwandlung という思想だろうと思うのであるが、この考え方が、トラークルに惹かれながらも表現主義に行かなかったというふうにも考えられるのであろうか。

植和田　：『トラークル書簡』に書かれている、リルケのトラークルに対する見方、これは彼が実際に作品を書いている言語と同質だと思うが、その彼の諸作品の中にも、トラークルとどうしても合一できない言語的な前提がある。彼の言語はそこへは到達できないし、勿論またこれを望んでもいない。しかし彼が作品体験において、トラークルに示した驚きには自分には無理だということもあるのではないかと思う。これはどちらが優れているか、という問題ではなく、またどちらが先か後かという問題でもない。本来言語というものは、理屈で取り入れようと思っても簡単には出来ないと思うからである。かりに『ドゥイノの悲歌』を彼の言語的最終到達点とすると、彼は言わば作品としてトラークルが言語化したようなものを理解しながら、しかしそれを概念化して、批評的視点から詩を作っている。それはリルケの優れているところでもあり、同時にその言語的限界でもあると思う。

西田　：『ソネット』の第二部の第三でしたか、鏡のことを書いている。リルケの場合、鏡の中へ入って行くという考え方を示すが、しかしここでは鏡の中へ入っていけないという、そのあたりが面白い。

植和田　：『体験』という文があるが、それがリルケの鏡の内部の体験かとも思う。そこでは「彼」という言い方をして散文形式で書かれている。これは虚構の言語作品の構造に近いと思われる。これらの点からもリルケは認識者としての姿勢が強かったのではないかと思う。

特集
アンケート
『私の好きなトラークルの詩』

伊藤　卓立: 『Verfall （ほろび）』

Trakl は、近親相姦、早くからのアルコール及び麻薬依存症、傲岸不遜、強い自意識等に由来する深い罪の念に捕われ、このままでは自分は地獄落が必定である、という「堕地獄」の判決を自らに下していたが、人はそれだけでは決して生きることができるものではない。「堕地獄」を確信すればする程、それだけ一層清浄無垢なる世界への、ほとんど非現実的な、その実現が絶対に否定されている憧憬が強くなる。地獄を人以上に知る故に、Trakl は清浄な世界を知っている、と言えよう。無明の地獄の中からの、実現不可能な願望と認識されたる清浄界への憧憬とその絶望が、詩『Verfall 』に於いて内容的にも形式的にも見事に形象化されている。

植和田光晴: 『Klage II（嘆きII）』

「好きな」一編に名指されるべき候補作品を思い浮べてみる。『ほろび』『美しい町』から始まり、『エーリス』『さすらい人』『世を離れ棲む者のうた』----、そして最後期の『帰郷』『嘆き』『グローデク』----。しかしこれらの中から一編を挙げるとなると躊躇をともなわざるを得ない。これらの作品の一つが、記憶のなかでその他に対してたとえいくぶんかの優位を占めていたとしても、それは、それが「好きだから」という理由づけとは必ずしも重なり合うものではないという思いがつよいからである。

それにもかかわらず、なお一編を選びださなければならないとすれば、これまでの付き合いの深さからしても、結局『Klage II（嘆きII）』に落ち着くであろう。いずれにしてもこの詩は、私の最も早い時期のトラークル論に主題として取り上げられて以来現在に至るまで、ことあるごとに中心的テーマとしての考察を迫ってくる、もっともトラークル的な作品である。以下において、その論考『トラークルの「嘆き」について』(1971)の終結部を「私の一編」の理由づけとして抜粋、転記する。

［理由］: 青い冷気をたたえて、帰郷者の眼下に口をあけた底知れぬ谷、そこは［さびしい墓地］が指し示す死の領域であった（『帰郷』）。そしていま、この詩［『嘆きII』］で永遠性への墜落の瞬間（Sekunde zur Ewigkeit）が言葉と形象に定着される。波打つ岩礁に砕け散る「深紅の肉体」は死による肉体の解体である。一方この肉体の死に際して、なお存続するもの、人間の魂は、翼ある生物となって海面を舞いながら嘆きの歌をひびかせる。Schwester stürmischer Schwermut ……以下の詩行では、文字どおり詩人の生の基調であった罪の意識にともなう激しい憂愁が嘆かれている。……

この『嘆き』の空間を先ず身体内空間ともいわれるべきものであると言おう。空間の知覚はなによりも身体的感覚でなければならないし、すでにみたようにトラークルの詩は体験の直接性を特徴とし、これもまた身体感覚として統覚的認識以前に知覚される世界の表現ともみられるからである。……眠りも死も、詩的想像力の前には単なる生起としてでは

なく、日常的生を超えた空間として開かれる。……砕けた小橋の下にうごめく幽暗（『帰郷』）に身を投じながら、トラークルは、その落下の空間を詩的空間として投げ上げるのである。

落ちていくところ、それは海であり、また海でなければならない。そしてこの海は広がりの海ではなく深さの海である。岩礁に波打つこの海は水平線をもたないのである。勿論この深みは海底への深みである。そしてこれら全てはまた詩人の嘆きの空間である。なぜなら「大洋の怒りは魂の苦悩に照応する」(G.バシュラール)からである。そして詩人の個別的な空間はその具体性と臨場感をそのままに保持しながら、その中でこの個別性が砕け散る、普遍的な原初的空間としてわれわれを覆い包む。論理と意味がまさに消滅する瞬間に「ごらん」という呼びかけが、このように悲痛と絶望を湛えながら、なおかつ救済の予感（E.ラッハマン)として聞きとれるのは、この没落の後に救済が始まるという意味ではなく……没落そのものであることによるかすかな再生なのである。詩の現出と同時に無言の天が覗きこむのは、すでに逆転せられたヴェクトルを暗示するかのようである。

ノヴァーリスの夢が天上の大気の意味においてでなく深さの意味において夢の中の夢であり、彼は「見者」というよりは「触者」というべきである（バシュラール）なら、トラークルの世界もまたそうした深さの世界であり、彼は人間存在の嘆きの空間を詩人の全能力をかけて触知したというべきであろう。

三枝　紘一：『Das Gewitter（雷雨）』

トラークルと並んで私の好きな詩人はヘルダーリンであるが、後者が多くのドイツ語圏の詩人がそうであるように、思想で押していく詩人であるのに対して、トラークルはイメージで押していく詩人ということができる。私にとってトラークルの詩の最大の魅力は、その豊かな暗示性に富む感覚的なイメージの連鎖にある。好きな詩は沢山あって、一つ挙げるとなると難しい。中期以降の作品は、それぞれ独特の魅力がある。また形式的には古いにもかかわらず心惹かれるものがあり、また欠点があっても捨てがたい詩がある。

有名な詩に絞って何編か挙げれば、『Verfall 』、『Kaspar Hauser Lied』、『Abendländisches Lied 』、『An die Verstummten』、『Ein Winterabend 』等ということになろうか。しかし形式的に最も突出した詩で好きなものと問われれば、１９１４年から１５年にかけてブレンナー誌に発表された詩と答えるであろう。この詩群は伝統的な詩的レトリックも混用された最後期の詩『Klage Ⅱ』、『Grodek』（『Im Osten』もこれに含められうるであろう）は除いて、トラークルの詩業において最も進んだ形式、すなわち最も表現主義的な形式を獲得していると言えるだろう。これらの詩は今迄の詩とはうって変わって脚韻等従来の詩形式にとらわれず、言葉が断言的に投げ出され、激しい調子を帯びている。この詩群の中で、この面で形式が最も純粋化されている詩の一つ『Das Gewitter』を選んでみた。おそらくチロル・アルプスの荒々しい山岳風景から素材をえた、黙示録的に展開される、豊かなイメージの暗示性にいつも感銘するのである。しかし最近では加齢のゆえか、中期の形式の整った静謐な情調性のある詩に惹かれるようになってきたことも付記しておきたい。

高橋　喜郎: 『Abendlied （夕べの歌）』

この詩は短調のアダージョで奏でられている。しみじみとした哀しさが伝わってくる。この詩では、詩人の妹に対する深い同胞愛が主題になっていて、その思いは澄んでいる。妹をテーマにした詩は多いが、その中でもこの詩は、最も卓れたものの一つであろう。エーリッヒ・ボリは、彼のトラークル論の題をこの詩の言葉から取っている。

中村　朝子: 『Die Schwermut （憂愁）』

最初に読んだトラークルの詩で、その時に受けた強烈な印象がずっと続いています。この詩は詩人が１９１４年６月にインスブルックで、つまり翌７月に大戦が勃発し、自身も東方戦線に出発し、やがて戦場で死を迎えるという運命を目前にして書かれたものです。この詩は詩行が短く、リズムは硬くなり、劇的傾向が強まる晩年の詩に特有の特徴を持っています。そしてそうした言語形式において、詩人は一方で、言い様のない絶望を耐えられない限界にまで押し進めることで、救済や希望に反転させようというほとんど不可能な行為を要求し、そこからこの詩に力強いダイナズムが生み出されています。しかしもう一方で詩人にはその行為の挫折が予感され、それを敢えて甘受しょうとするその姿勢に不思議な静謐さが漂っています。この動と静の両極が引き起こす激しい緊張がこの詩を読む者の心を激しく揺さぶるのだと思います。

１９９７年度会員業績リスト

三枝紘一: トラークルの詩における Elis モチーフ —— 一つの神話の典拠 ——
（日本大学松戸歯学部一般教育紀要）

１９９７年度活動報告

1. 6月 7日（土）午前10時より12時迄春季総会及び研究発表会が東京都目黒区の緑が丘文化会館（本館）第２研修室で開催される。

出席者：石橋道大、植和田光晴、三枝紘一、高橋喜郎、中村朝子、西田英樹、前田和美、南谷和伸、宮原朗

総会：(1)1996年度の本会の決算が報告され承認された（別掲）。

(2)秋の独文学会が遠方（沖縄）で開催されるので、当会の例会がその前後に沖縄で行われうるかどうかが問題にされ、参加予定者が少ない場合は他の地区で催すか、あるいは今回に限って休会にするかが検討されたが、まだ態度未決定の会員が多く、もう少し様子を見るということで決定は保留となった。

(3)本会の新規活動・企画として、一つのテーマを決めて会員が共に取り組むという企画が提案、検討されたが、決定は保留となった。

(4)ザルツブルクのトラークル記念館とコンタクトする連絡員に三枝紘一氏が決定した。

研究発表会：　石橋道大　「トラークルの跡を訪ねて」
植和田光晴「リルケからみたトラークル」

（なお当日の午後 6時から自由が丘の「楼蘭」で懇親会が開かれ 8名の参加があった）

１９９６年度決算報告

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	26958	切手代	8030
本年度会費	36000	協会会報印刷代	15000
		封筒代	525
		会場費（京大会館）	3090
		会場費（緑が丘文化会館）	700
		本年度支出合計	27345
		次年度へ繰越	35613
		（内、本年度剰余金）	8655)
合計	62958	合計	62958

2. 10月11日、東京の新宿において本年度第１回幹事会が開催される。

出席者：伊藤卓立、三枝紘一、高橋喜郎、中村朝子

(1)沖縄で開かれる日本独文学会に参加予定の当会の会員が少数のため、秋の例会は成立が困難ということで、今回に限って見送ることになった。

(2)「私の好きなトラークルの詩」というアンケートを取ることになった（詩は複数でもよく、できればその理由あるいはコメントを付記する）。

他に来年度春季例会、新規活動・企画等について論議された。

3. 3月11日、東京の新宿において本年度第 2回幹事会が開催される。

出席者 ： 伊藤卓立、三枝紘一、高橋喜郎、中村朝子

春の例会、本年度会報、秋の例会等について論議された。

4. 3月31日、1997年度会報が発行される。

お知らせ

1. 会報に会費用の振込用紙を同封しましたので御納入の程よろしくお願い申し上げます。
2. 春の例会は次のように行われます。

日時 ： 6月 6日（土）午前10時から12時迄

会場 ：東京都調布市文化会館「たづくり」小会議場

1） 総会

2） 研究発表会　1. Neri, Mateo:「Die universelle Form. In: Das abendländische Lied」合評

2. 伊藤卓立　：「限界の体験 --- リルケと比較して --- 」

3. 日本独文学会会員名簿のゲルマニスティク関係研究団体の欄に当会が記載されました。
4. 秋の例会の発表者（論題）を募集しています。締切は 8月末日です。

会員消息

1. 新会員　　西岡あかね　東京大学博士課程
2. 住所変更　三枝紘一、南谷和伸

郵便番号が変わりましたので今回巻末に会員名簿を掲載しました。御参照下さい。

編集後記

今年度の会報は、秋の例会が中止になったために、その研究発表のレジュメと質疑応答がなく、分量が少なく薄いものとなったのは残念であった。

これを見越し、また寄稿も期待できないこともあって、「私の好きなトラークルの詩」というアンケートを募ってみました。外からは一様に見えるトラークルの詩世界も中へ踏み込んでみるとその多様性に驚かざるをえない。習作期を別にすれば、詩人の詩の実作期間は約8年に過ぎないが、様々な詩形が見られ、内容の面でも種々様々であり、またその発展の早さは著しい。中期以降の作品は、ほとんどの作品が独自な魅力があり、投稿された方は好きな詩を一つ選ぶのに苦労されたのではなかろうか。

石橋氏の御発表は、最近のトラークルに対するザルツブルク市（当局）の取扱いの変化の点で興味深かった。背景に観光対策の面も見え隠れするが、当局にトラークルの詩の理解者がいるのではないかという気がする。ヴァイクセルバウム氏を始めとする、トラークル記念館の関係者の努力も、もちろんあるが、当局の理解もなければこれほど各所に詩が掲げられないだろう。これによってトラークルの詩が多くの人の目に触れ、少しでもその愛好者が増えることを期待したい。このように沢山の詩が掲げられた一つの理由に、ザルツブルクに取材した詩が多いこと、具体的な地名が入っていること、更にはタイトルに地名が用いられている詩も幾つかあるということ、があると思えるが、これほど沢山生地に詩が掲げられている詩人は他にいるだろうか。その意味でその詩を愛好する者にとっては嬉しいのであるが、しかし「トラークルの泉」や「トラークル小橋」や、これはインスブルックであるが「トラークル公園」等もあるということを聞き及ぶにつれて、地下のトラークルは、これをどう思っているのであろうか、と考えてしまう。詩人はそんなことをして欲しくないと言うのではないだろうか。

おかげさまで第3号がまがりなりにも発行の運びとなりましたが、今後、俗に言う「三号雑誌」にならないよう編集者としても出来る限り努力してまいりますので、会員の皆様方におきましても一層のご支援をよろしくお願い申し上げます。　　（さ）

トラークル協会会員名簿 (1998.3.31現在)

石橋　道大 伊藤　卓立 植和田　光晴 鍛治　哲郎 加藤　泰義 川添　悦男 児玉　昭人 小松崎　瑞彦 三枝　紘一 高橋　明彦 高橋　修 高橋　喜郎 瀧田　夏樹 筑和　正格 中村　朝子 西岡　あかね 西田　英樹 前田　和美 三木　正之 南谷　和伸 宮原　朗	